輝け理系女子

豊橋技術科学大学の挑戦③

女性研究者を増やすために

パネルディスカッションで名大の東村氏は、2002年から男女共同参画室を設置している名大の、保育園・学童保育所を作った取り組みなどについて紹介した上で「男女差より個人差・人間力。女性にも素晴らしい能力がある。そこを生かすことが、ものづくり愛知の発展につながる」と述べた。

経済専門の立場から名市大の井上氏は、「潜在的な女性のマンパワーをどのように活用するか、そこに日本社会の伸びしろがある」と、高学歴女性のパワーを活用できないことが社会のひずみとして経済状態に現れているのではないかと考える。

また、加藤氏は「女性のマインドも変えていきたい」と、草の根的ネットワークで女子会なども開催し、女性研究者の孤立を防いでいる。東村氏も「経験から、分野を広く公募すれば必ず女性が応募する」、「本気になれば動き出す」と技科大にエールを送った。

文部科学省科学技術人材育成費補助事業として3大学のほか、産業界、行政の協力を得て「AIC HI女性研究者コンソーシアム」を構築するこの取り組みの役割について、東村氏は「生活者の視点をものづくりに生かすべき」とした上で、現在は生活者＝女性が多いが、社会全体の働き方を変え、ワークライフバランスが充実すると、男性にも生活者の視点が持てると、働き方を変える仕組みづくりも提案した。

技科大の取り組みを応援する東村氏

大西学長は、「来年度（15年度）から、もっと踏み込んだ女性登用を考えていかなければならない」と強い姿勢を示し、「大学での人選は、選ぶ努力・探す努力が必要。並行して環境づくりをしていくべき」と具体的な方法も提示した。さらに「他の2大学に比べて、技科大は女性の登用についてまだまだやるべきことがある。女性が活躍するモデルも示していきたい」と締めくくった。

（戸崎史子）